

第45回企画展  
**収蔵庫蔵出し展  
 2012**  
 平成24年2月18日(出)  
 ~3月18日(日)

今回の第45回企画展は「収蔵庫蔵出し展2012」平成24年2月18日(出)~3月18日(日)を予定しております。当館で企画する「収蔵庫蔵出し展」は今回で第4弾となります。普段は収蔵庫に収蔵してある資料を期間限定で公開いたしますので、ぜひお越し下さい。

2001年1月1日午前0時(21世紀の始まり)に開館した「みちの郷土史料館」は、昨年12月31日末をもって開館10周年を迎えました。当館では、これを機に、最大の展示物であるスライド映像を一新することにしました。これまでの映像は、「旅」をキーワードに、街道を行く人々を描いていました。特に、大名行列は、県内各地の史料館から屏風絵等の図柄を許可を頂いて複製したもので、往時の行列を思い浮かべていただけたものと思います。今回の新たな映像は、「道が運ん

だもの」をキーワードに「みち」を往來した人物・文化、特にシュガーロードと呼ばれる「長崎街道」独自の食文化をとりあげています。また、動画を組み込んで、より生き生きとした映像で「長崎街道」を学んでいただけるものと、制作作業を進めております。今春4月以降には、新たな映像を来館者の皆様にご覧いただける予定です。どうぞ、ご期待ください。そして、新たな史料館へのお出でをお待ちしております。



# 寄せ太鼓

道館会 長崎街道木屋瀬宿 長崎報 市八幡西区木屋瀬 九州市八幡西区木屋瀬 北九州市八幡西区木屋瀬 三丁目16番26号 (〒807-1261) TEL 093-619-1149 FAX 093-617-4949

## 「みちの郷土史料館」 映像リニューアル 長崎街道独自の食文化などを紹介



木屋瀬の寺々にはお地蔵様が祀られている。寺以外のお詣り所や墓地にも祀られている。他の町村でも道端や旅人の憩いの場や子供達の遊びの場等でお地蔵さまを見かける。このようにお地蔵さまは、人々の生活の中に祀られ、人々の暮らしの中に溶け込まれている仏さまと考えられる。それにお地蔵さまは頭は丸坊主であり袈裟や衣をつけられていて普通のお坊さんと同じお姿であり、私達の心にはお友達のように明るく楽しさがある。 笥の巻してござる地蔵尊 お地蔵も加はっている踊りかな

こんな句がたくさんあるように、お地蔵さんには語りかけたくなるような、手を触れてみたくなるような親しみがあ。そして子供のことの願いは何でも叶えてくださる仏さまと信じられている。万一子供が交通事故等で亡くなったとしても、お願いすれば他界の子供までもお救い下さるありがたい仏さまである。

隣の町で子供達が石の地蔵さまを縄でくくり、小川の中を引き回しているのを見たので、古老に聞いてみた。昔雨乞いの遊びとなりましてと言われた。お地蔵さまと子供達とは「バチがあたる」と言った考えはなく、川の中の地蔵さまも子供達も大声で笑っていた。豊後森の地蔵盆の大祭におまいりした。商店街の華やかな燈し火の中に、各町内毎にお地蔵さまがお出ましになり、美しく飾られ祀られている。この町内毎のお地蔵さまを子供達が連れ連れに巡拝してゆく。子供を主とした最上の美しいお祭りである。

## 木屋瀬の昔話

柴田豊廣遺稿集より

木屋瀬(12)

木屋瀬東部の稚児ヶ原に祀られている地蔵さまのお詣りには、穴の明いた小石に願いをこめる習わしのあった事や木屋瀬町の永源寺の六地藏さまのお詣りにマツクリかえりを奉納する習わしがあった事は前に述べていると思うが、町部改盛町の愛宕さまは、將軍地蔵さまを二本尊として開基されたと伝えられていて、火除けや魔除けに煩惱まで払って下さる仏さまとして知られていた。加えて探し物や尋ね事等々の古いもされていたので、遠き近きの人々は、心置きなくすぐにお詣りをしてきた。改盛町では、お祭り奉納の子供角力等を催され、お詣り

も多く賑やかであった。あまり広くない境内には、お供えされた裸火が美しく揺れていた。

往時木屋瀬は、藁葺きの家も町並みに点在していた事であろうし、暮らしの明かりも菜種油のような物で、燃料も薪や萩が主であったと思われ、火災も頻発していたと伝えられている。但し愛宕さまの源水法師は、將軍地蔵さまに懸命に鎮火の祈願をされていた事も伝えられている。

木屋瀬町部の中心に大火災が発生している、明治四十五年五月十四日午前零時の出火である。新町の一部より本町を全焼し、中町を焼き下町の一部を焼いて鎮

火している。この大火災に百二十四戸が全焼し、五戸が半焼し、防火の為に六戸を引き倒すと言った大惨事であった。これの復興には、罹災救助金法の救助を受け、米国、清国の同胞からの救助も受けている。国内では、七府七県七郡、三十の町や村、十七の学校、十の協会、二十五の寺院、八つの炭鉱、五十を越える団体等々から救助を受けている。この大火災にも、愛宕さまの法師は、火の粉が降り舞う猛火の風下に立ち、法螺貝を猛火に向けて吹き鳴らしつづけ、將軍地蔵さまに一生懸命に鎮火の祈念をされていた。消火器らしき物のない時であり、神様や仏様や人々の意気と力とが、ただ頼みであった。真夜中の空は恐ろしく真赤に焼け広がりが、町の通りには火の粉が渦を巻いていた。人々は低くうめくような声で呼応しながら縦横に飛び交っては猛火に向かい、ただ意気と力とで打ち消し、打ち壊していた。六戸を引き倒しているが、これが頼みの人力消火法であった。町内毎の太鼓と、寺々の梵鐘が打ち鳴らされ、それはそれは物凄いく状況であった。鎮火した、今度は子供を探し親達の悲壮な姿が飛び交ったけれど、子供達はみんな氏神さまと扇天満宮さまに守られていて無事だった。各家々の焼け跡に残っているカマドと風呂だけをいせながら、悲惨な夜が煙の匂いの中で明けて来た。

文学散歩等の集まりで見学に来られているほどに価値ある木屋瀬であり、火の元に注意して頂いて、みんなで守ってほしい木屋瀬である。

本町 柴田由美子

## 今回は雨天の中で開催

前日は止んでいた雨が朝からしとしと降り続く中で、開会式は予定通りに多数の来賓者出席のもと、記念館広場に於いて行われました。雨が降り続く雨のためにその後のプログラムはこやのせ座に変更、皆様のご協力により全てのプログラムが予定通りに終了しましたことをご報告申し上げます。これも、まつりに対する皆様のご理解の賜物と厚く御礼申し上げます。また、急な開催場所変更に対し機敏に対応いただいた木屋瀬宿記念館関係の皆様・まつりスタッフの皆様にご御礼申し上げます。

■企画準備に時間を  
 9月22日「宿場まつり実行委員会」が発足、正式に企画部長に任命され直ちに部会を編成、まつりまで約40日間8回の企画会議を行い、まつりの懸案であるマシネリ化を改めるべく熟慮いたしました。時間がなく今までの企画を検討実施することになりました。このようなことが毎年繰り返され、このことがまつり形骸化の事態であり私自身大いに反省し、「筑前木屋瀬宿場まつり実行委員会」の早期立ち上げを主催8団体に申し込みました。考えることの出



雨に降られた：第19回筑前木屋瀬宿場まつり考

来る企画時間の確保で「歴史と文化の薫るまつり」がさらに発展するために、「木屋瀬宿場をどり」筑前伝承盆踊りの祭典」を中心とした「宿場まつり」に新たなスパイスが必要と感じたからです。

■参画・参加でもっと良いものに  
 今年から、まつりの企画会議に運営・広報及び会計の代表者が参画するように変更いたしました。3部会+会計で「まつり」を企画することで会議の場で各部会の問題点が事前に解決でき、当日の運営がスムーズに進行すると考えたからです。今回雨で大幅に変更された企画が大きな問題もなく運営できたのは、その効果が現われたものと思います。

最後に、今年「筑前木屋瀬宿場まつり二十周年」及び「長崎街道開通四百周年」の記念すべき年でもあります。「まつり」に対するご意見を「ご遠慮なく申し出て下さい。」「木屋瀬宿場まつり」が「木屋瀬の誇り」となるには、皆様「まつり」に参加していただくことであり、また「まつり」の場に出てきていただくことも大切だと思います。今後とも皆様の積極的な支援とご協力のほどよろしくお願ひ申し上げます。

平成23年度筑前木屋瀬宿場まつり実行委員会 企画部長 近藤 浩

## 報告 講座「木屋瀬 時代の散歩道」

平成23年9月16日(金)~10月21日(金)に行われた講座「木屋瀬 時代の散歩道」も、今回で9年目となりました。全6回の講座を開催し、木屋瀬、シュガーロード、戦国豪商をテーマにした講義や、木屋瀬をはじめ楠橋、香月地区や佐賀、長崎の長崎街道の見学を実施しました。今年の参加者は60名と大変多く熱心に受講して下さり、木屋瀬の魅力が改めて知っていただけたかと思えます。



## 報告 企画展 時計展 ~木屋瀬の時と共に~

平成23年12月11日(日)まで開催しておりました第44回企画展「時計展~木屋瀬の時と共に~」は、実際に振り子時計を動かして展示をいたしました。現在ではあまり見かけなくなってしまった懐かしい時計の音と共に、昔の事を思い出された方もいらっしゃるのではないのでしょうか。来場者は682名とたくさんの方に来館していただきました。皆様のご来館誠にありがとうございました。



史料館お宝紹介  
 炭鉱記録画や日記など、約700点が世界記憶遺産に登録された山本作兵衛氏の作品4点を、常設展「木屋瀬炭鉱」のコーナーに追加展示しています。

山本作兵衛氏は、幼い頃から筑豊の炭鉱を渡り歩き、60代半ばから自らの経験や伝聞を基に記録画を描き始めました。絵に解説文を組み合わせたという独特の手法は、探炭の傍らつけていた日記により生れたそうです。当館に保管されていた作品は、全て地域の方から寄贈されたもので、当館では第31回企画展「木屋瀬と石炭」展で展示致しました。その後、収蔵庫で保管していましたが、今回の登録を受け常設展に追加展示という形で作品の公開を行っています。作兵衛氏がよく描いたとされる炭鉱内の絵や遠賀川を描いたものがあります。

山本作兵衛氏に関連した書籍も多数ございますので、こちらをご覧ください。



「山本作兵衛炭鉱記録画」

### 第11回 木屋瀬いろは歌留多大会



- 入賞者 (敬称略)
- |       |         |          |          |
|-------|---------|----------|----------|
| 【小学部】 | 優勝 野本 梅 | 準優勝 上梅 本 | 優待賞 野本 梅 |
| 【一般部】 | 優勝 吹本 山 | 準優勝 吹本 山 | 優待賞 吹本 山 |
- その他、小中高校生以上は、各賞の順位は別紙に掲載されています。

正月恒例の「木屋瀬いろは歌留多大会」も回を重ね今年はいよいよ11回目となりました。子どもと大人の部(中学生以上)に分かれ会場は熱気に包まれました。勝負に勝った子供の笑顔や、負けた悔しさが会場の応援者や審判や関係者に伝わり和やかな一時でした。またここのせ座運営部会ボランティアの用意したウドン・ぜんざいの接待に大変喜んでいただきました。

木屋瀬ならではの歴史・風物などを多彩に織り込み考案された「若井屋不彫さんの木屋瀬いろは歌留多」今回ご紹介するのは「一」。

西に 雨雲 六ツヶ岳

《説明》木屋瀬から西の方向 遠賀川の対岸向こうに見える山並みが六ヶ岳と申しまして、宮田町・鞍手町・直方市にまたがる山塊でございます。天候は概ね西の方から変わると申しします。木屋瀬では昔から六ヶ岳上空の雲の様子で天候を予測していました。

いろは歌留多は宿場往時の歴史と文化を学ぶ(徳ぶ)に最も適した身近な教材です。子どもたちの参加を大切にしながら、木屋瀬住民の皆様にも多数ご参加して頂きたいと思っております。第11回を振り返りこの大会を皆様の手で益々発展させて頂きますよう重ねてお願い申し上げます。

ここのせ座運営部会 山田 靖

### 第24回 舞岳神社(笹田)



石段を登る途中には、檜の植樹や神社復興の記念碑があり、鳥居は弘化二年(1845年)と彫られ江戸期に建立されています。境内は清冽な空気が漂い、檜や杉などの巨木が発する気が充満しているような雰囲気、正に鎮守の杜です。

「鞍手郡木屋瀬町誌」によりますと、舞岳神社は、正応二年(1289年)に勧請し、イザナギノ命(男神)イザナミノ命(女神)シナオサツヒコノ命、シナオサトベの命、の四神を祭神とすると記され、元は舞岳山頂にお祀りされていましたが、何時の頃からか、森の中腹に社を建立し、上官の神を勧請し、外官と称すようになったとあります。又、上官の北に大岩があり、村民は風穴と云い、これに触れると大風が起るという口伝があるとも記されています。

「古事記」や「日本書紀」の神話に依りますと、イザナギとイザナミの神が結婚して夫婦となり、八つの島(淡路)を生んだと伝えられ、日本国誕生の神様であると記されています。又、八つの島が誕生したものの、その地は荒涼とした大地であったので、夫妻は大地を豊かにす

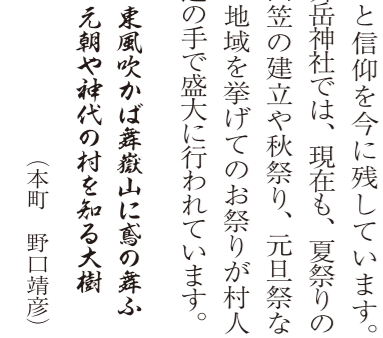
### 神道の原型を今に伝える神社

るために、海の神 山の神 木の神 水の神 風の神などの万物を生成して豊かな国を創ったとあります。その中の風の神様が、シナオサツヒコノ命とシナオサトベの命の神様です。風は神霊の乗り物で、良い風もあれば悪い風もあるもので、当時の村の人々は暴風等の災害を防ぐ神としてお祀りしました。笹田地域の人は、この四神を敬い、五穀豊穡と村の繁栄、健康長寿を願ったのです。元来神道では、森や山の巨石や巨木等に神が降臨されると信じられ、その場所を神域として注連縄を張り、神と酒食を共にしお祭りをしていました。神様が出来たのは、歴史的には遅く仏教が入ってきたからです。舞岳神社も、古くは、山中の巨石や巨木の前でお祭りしていたのでしょう。その後、神域を建立してからも、神官が常住するようなことはなく、村の人々が交代するなどしてお守りし、祭りの時などに神主を要請していたようです。古くから一般的な山村の神社はこのような形態でした。舞岳神社は、現代に神道の原型を残す形で、今も村人達が中心で祀られています。笹田という地名の由来については、笹田から転じたとの説もあり、又、昔当地に、小峽田彦という人が住んでいたもので、小峽田村から転じて笹田に成ったとも古書は伝えています。この笹田地域は、長い歴史の上に立って村民の強い絆が、貴重な文化と信仰を今に残しています。

舞岳神社では、現在も、夏祭りの山笠の建立や秋祭り、元旦祭など地域を挙げてのお祭りが村人達の手で盛大に行われています。

東風吹かば舞岳山に鶴の舞ふ  
元朝や神代の村を知る大樹

(本町 野口靖彦)



舞岳神社復興の記念碑

### 木屋瀬宿安政六年『年中御用留』安政の三日コロリ

前号では、安政六年八月九日以来、木屋瀬宿に於いて急に吐気を催し、吐瀉や瀉痢(下痢)に続いて手足が痙攣で萎える症状は、正しくコレラである。十数日間に軒並に二十三人に及ぶ発症であったことが、村庄屋の記した『年中御用留』の十七枚目に、「口上之覚」という表題で左記の文言が書かれている。

「私儀(自分は) 諸国神社仏閣を拝礼(各地の神社や寺院の参拝で) 罷出之処(旅をして) いる次第で、当月(五月) 廿二日御当地(木屋瀬宿) 通り掛り、不図(思いがけなく) 病氣付相致居候二付、(病氣になりましたので) 早速医師江御見せ(医師の診察を受け) 薬用介抱等被成下候得共(薬などで治療を受けた次第ですが) 一圓(全く) 快方二(病気が直っていく) 相成不申(回復ができません) 御厄介二相成候間(治療や宿泊でお世話に今後となりますので) 何分(何卒) 申上兼候得共(申しわけありませんが) 国元江罷歸り度候 世話宿村継送出可被下候様御願申上候以上(郷里へ帰りたいので木屋瀬宿から旅を重ねて来た宿駅等へ連絡で伝えて下さい) 肥前国嶋原 有家郡有田村甚作衛門娘その

この甚作衛門なる娘、そのが木屋瀬宿で病に倒れた日付は、五月廿五日となっている。前号で述べた二十数名なるコレラ発症時より三ヶ月前であるが、『年中御用留』にはページを重ねていくことにコレラ発症の「口上之覚」が数多く書き留めてある。

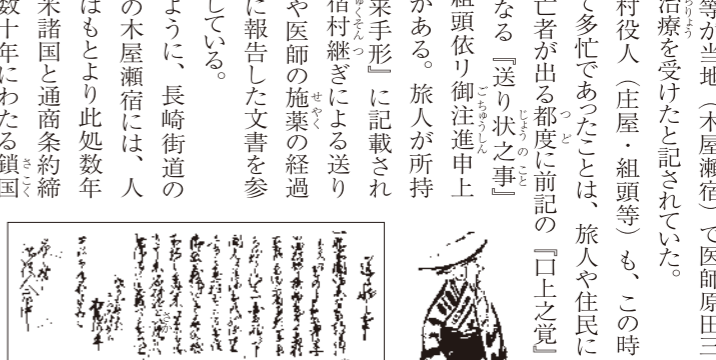
幾つか順を追って記述すると、八月三日の肥前国御城下町又兵衛なる者の病氣発症の覚書や八月十七日付けの江戸は西久保町松五郎なる旅人。更に翌日の十八日に阿波国東郡津村真衛門等が当地(木屋瀬宿)で医師原田三省の薬用治療を受けたと記されている。

宿駅の村役人(庄屋・組頭等)も、この時期は極めて多忙であったことは、旅人や住民に病人と死亡者が出る都度(つと)に前記の「口上之覚」の外に次なる「送り状之事」

「庄屋・組頭依り御注進申上ル事」等がある。旅人が所持する「往来手形」に記載された国元へ宿村継ぎによる送り状と病状や医師の施薬の経過を郡役所に報告した文書を参考に掲載している。

以上のように、長崎街道の筑前六宿の木屋瀬宿には、人馬の往来はもとより此処数年より欧米諸国と通商条約締結で二百数十年にわたる鎖国から一大転換で開国したので、長崎へ続々と外国船がやってくるようになると、海外から舶来品が到来すると共に伝染病も伝わって来た。

この年の安政六年は猛暑で、7月頃より筑前領内にはコレラらしき疫病の流行に拍車がかかった。「これは大事だ」と、箱崎宮・太宰府・鳥飼八幡宮など領内十五郡の神社でも祈祷がなされ、疫病退散の守り札が出されたという。このように、旅人の発病に端を発したと思われる



るコレラの蔓延は、木屋瀬宿の人々を極度に脅かして最盛期には数十人の罹患者が『年中御用留』に書かれている。

恐らく木屋瀬宿の祇園社でも、コレラ退散の祈願や悪病除のお守り札が町並の軒下にある門口に張られたであろうと思う。

家族の介抱や医師の手厚い薬餌にも甲斐なく死亡した人々多いことが、次のような文言で郡奉行所に届けられている。

〈当村勤七女房八月廿九日夕依 不図病氣付候間御施薬 丸薬一粒両度相用吐瀉烈 再度老粒充二粒丈相用候得共 薬用不相叶 相果申候此段御座申上候 宜敷御聞通被仰付可為下候 以上〉

勤七の妻は薬効も甲斐なく治療することなく死亡(相果)した事の届である。当然、埋葬されたわけであるが、埋葬地は木屋瀬小学校の道路を隔てた山浦池の横に丘陵地であ

るコレラの蔓延は、木屋瀬宿の人々を極度に脅かして最盛期には数十人の罹患者が『年中御用留』に書かれている。

恐らく木屋瀬宿の祇園社でも、コレラ退散の祈願や悪病除のお守り札が町並の軒下にある門口に張られたであろうと思う。

家族の介抱や医師の手厚い薬餌にも甲斐なく死亡した人々多いことが、次のような文言で郡奉行所に届けられている。

〈当村勤七女房八月廿九日夕依 不図病氣付候間御施薬 丸薬一粒両度相用吐瀉烈 再度老粒充二粒丈相用候得共 薬用不相叶 相果申候此段御座申上候 宜敷御聞通被仰付可為下候 以上〉

勤七の妻は薬効も甲斐なく治療することなく死亡(相果)した事の届である。当然、埋葬されたわけであるが、埋葬地は木屋瀬小学校の道路を隔てた山浦池の横に丘陵地であ



平成23年度 子供えびす頭

12月3日、4日と須賀神社にて8名の児童による子供えびす頭が行われました。元服の意味をもつこの祭りは、昔は数歳の11歳、現在では小学校4年生の男子を頭(かしら)と呼び、頭が主役となってえびす祭りが執り行われます。8名の頭の名前が披露された紅白の幕を笹山笠に張り、二日間に渡って町内を曳き廻しました。師走ではありましたが天候にも恵まれ、8名全員が元気一杯山笠を曳き、社宝を持って御神幸行列で町内を廻りました。二日目は山笠を曳いた後、祝い善(江戸時代には大名に振る舞われた物)につき、滞りなく二日間の行事を終えることができました。今回、子供たちがこの行事を経験したことで、木屋瀬の伝統文化に関心をもちながら育っていくことと思います。

最後になりますが、この頭の行事の準備から、本番終了まで、ご協力頂きました皆様方、ご芳志頂きました皆様方に、平成23年度子供えびす頭関係者を代表致しまして、心よりお礼申し上げます。

代表世話人 緒方 博